

# 現代イスラーム世界の動向

—アルジェリア・イスラーム主義の高揚と挫折—



小山田紀子

吉備国際大学助教授

於

平成十七(二〇〇五)年三月二日(火)一〇:四〇~一二:〇〇  
跡見学園女子大学 二二七二号(視聴覚)教室

北アフリカのマグレブの中央に位置するアルジェリアは、一八三〇年からフランスの植民地支配下におかれたが、一九五四年十一月一日、民族解放戦線FLNが武装蜂起を開始し、世界でもっとも激しい独立戦争の末、一九六二年、アルジェリアはついに独立を達成した。

さて独立後、FLNが実権を握るアルジェリア政府は、社会主義路線を打ち出すことになるが、アルジェリア社会主義の実験は、農地改革から始まった。独立と同時に一〇〇万人のフランス人植民者がアルジェリアから出国し、所有者不在となった農地は、アルジェリア人農業労働者によって占拠され、自主管理農場として国有化され、組織化されることになった。しかし、植民地時代の経済の二重構造は放置されたままであり、さらに一九五六年にサハラ砂漠で発見された石油開発を基盤とする重化学工業優先政策のために農業政策は失敗し、都市化の問題を引き起こし、都市と農村の生活水準の格差や社会階層化を増長し、社会主義政策は矛盾を増大させることになった。

一九八〇年代に入ると、アラビア語とイスラームを支柱とした国民統合政策を押しすすめるFLNの一党体制に対し、民主化を求める運動が高まりをみせる。一九八六年の石油供給過剰に伴う石油価格の下落は、国家収益の約九十八%を石油・天然ガスの輸出に依存していたアルジェリア経済に大きな打撃を与え、国民生活を直撃した。物価上昇と高失業率に苦しむアルジェリアで、一

九八八年十月、都市の青年層を中心とした食糧暴動が発生し、やがて首都から地方都市にも波及して反政府運動にまで拡大した。

こうした中で一九八九年二月、シャドリ大統領はついに社会主義の放棄と複数政党制の導入を打ち出した。これに伴ない二十を超える政党が活動を始めたが、その中でも一九八九年三月に結成されたFIS（イスラーム救済戦線）は、大衆政党としてその影響力を拡大していった。そして一九九〇年の地方選挙と九一年の国会選挙にFISが圧勝するや、九二年シャドリ大統領は辞任に追い込まれ、軍部主導の政府は、選挙の無効化措置を発表、国家全土に非常事態宣言を発令してFISを非合法化した。これに対し、武力闘争を活動方針としていなかったFISは武装化をすすめ、軍部との武力衝突が始まった。さらに一九九二年十月にはイスラーム武装集団GIAが結成され、過激派によるテロで十万人の犠牲者を出す内戦にまで発展してしまった。軍部による作戦で内戦が沈静化した一九九九年、大統領に選出されたブーテフリカは、国民和解法により国家の再建に着手する。しかし、社会主義が放棄され、イスラーム主義運動も挫折した今、アルジェリアはどこに向かうのだろうか。昨年十二月、東京の国連大学での講演の中でブーテフリカ大統領は、内戦終結後の経済成長に自信を示し、二〇〇四年の再選後の民主化政策の推進を明らかにしたが、市場経済の導入という道筋が果たして国民生活を改善し国民の指示を得ることができるのか、アルジェリアの未来はいまだ不透明である。

※本稿は、講演者に依頼して当日の講演内容を一二〇〇字以内でという制限のもとに要約して頂いたものである。  
(編者)